

一〇二三年九月一日

痩せし腕取りてそこまで秋夕焼
芋の葉の半分程が喰はれけり
朝日刎ねダイヤモンドの草の露
広き野に牧草ロールひつじ雲

一〇二三年八月二七日

たか子 熊蟬に急かされて超ゆ山路かな
棺に入る汝れの遺愛の菊枕 みきお
水音と風も馳走や川床料理 もとこ
愛正

一〇二三年八月二六日
乗る人もなき炎天の観覧車 智恵子
広縁に正座して聞く秋の声 セイジ

大岩を卓に行厨いわし雲
のんびりと垂れて糸瓜の太さかな
薄雲に透けて幽かに望の月

明日香 智恵子
よしそ

毎日句会みのる選・一〇二三年九月三日

一〇二三年八月三〇日

なまくらな包丁を研ぐ残暑かな

ぽんこ

一〇二三年八月二九日

牧牛の大き瞳に秋の雲
び一玉は忘れものらし夏休み

素秀 あひる

一〇二三年八月二八日

拭きあげし廊下秋日を刎ねにけり
地下街は迷路のごとし秋暑し
巨人めく大きサンダル孫来る

澄子 あひる

むべ
みきお
もとこ
セイジ
智恵子
せいじ